

◆教科横断的な授業◆

昨年度の振り返りの中で、めざす生徒像や共通目標を全員がしっかりと認識した上で、「教科横断的な学習」に関わる視点を持ちながら、各教科の特性に応じた授業改善をおこなっていくことが重要であると全体で確認した。

しかし、「教科横断的な学習」というのは、簡単なようでなかなかむずかしい。一つの方法として、倉吉東高校で実践された『VIEW21』2014年2月号に紹介されていた「ゲスト・ティーチャー制度」がある。例としてあげられていたのが、1年生の「世界史A」で、他教科の教師が乗り入れて授業を行うというものである。例えば、中国史では国語科担当教員が漢詩文の、ルネッサンスでは美術科担当教員が絵画の解説を行うなど、それぞれの教科の切り口から世界史にアプローチすることをされたようだ。

松江東高校においては、こうした教科横断的な学習というのはまだまだ進んでいないのが現状である。

こうした現状を踏まえ、パイロット的な教科として位置づけているのが、県教委に申請中の**学校設定教科「EAST 地域探究」**である。島根大学とも密に連携を図りながら、問題解決型学習もしくは発見学習に教科横断的な要素を取り入れながら実施することを想定している。

教科横断的な学習は、カリキュラム・マネジメントの観点からも重要である。教科の枠を取り除くことは、新しい学力観の達成においても必要である。このことは、考える力、問題を解決する力、思考力を身につけさせるための、アクティブ・ラーニングが重要であることにほかならない。

◆アクティブ・ラーニングの教授法としての発見学習の可能性 ～地域教材の活用～ ◆

アクティブ・ラーニングの教授法の例としては、問題解決学習(PBL)、体験学習、発見学習などがある。その学習を実現する学習形態、つまり手段が協働を重視したグループ・ディスカッションであり、ディベートであり、グループ・ワークやペア・ワークであると理解している。

問題解決学習は具体的な問題を設定し、その解決を目指すものである。広岡亮蔵氏が提案した、知識・技術を単純化した生成過程を学ぶ学習としての課題解決学習とはほぼ同じと考えている。ちなみに、「問題」とは困っていることであり、不都合な事である。課題となるとそこには意思が入る。つまり、解決すべきことであり意識決定をとまなうものとなる。違う言い方をすれば、手を打とうとする問題が課題となる。

体験学習は具体的な実践経験を通じて、何かを学んだり気づいたりするものである。

発見学習は問題解決学習と系統学習との対立の中で生まれたものである。知識や真理を生徒に習得させる場合、発見の過程を各自に経験させる学習方法であり、ブルナーが提唱した学習方法である(参考『教育の過程』1960年)。特徴は、科学の結果を到達点とする過程主義をとるところである。科学の結果を出発点とする系統学習とは大きな違いがある。先日、松江養護学校の校内研修で、鳥取大学の三木和裕教授の講話を聞く機会があった。その中で、「学校教育は生活的概念から科学的概念を学ぶものである。理屈だけわかってもだめで、その概念が現実で生かされないといけない。」という話があった。系統学習の問題点を考えるときに参考になる話であった。もっとも発見学習は個性の開発と主体的学習の形成にはつながるが、発見にいたる過程を教師が誘導せねばならず、この教師の指導的役割をどう位置づけるかが大きな問題となっている。

なお、発見学習のねらいは次のような力の育成と理解している。

- ①問題を見つける力 ②問題を解決する力 ③内発的な動機付け ④転移する力

学習過程は、帰納法であり、少数の事例から直観で仮説を立て検証をしていく。流れを明示すると次のようになると考えている。

①課題の把握：発見すべき課題を明確につかむ。

②課題解決の仮説を立てる：予想を立てる。

直観的思考を大切にし、話し合いを通して見通しを作業課題まで誘導する。

③仮説の検証：論理的思考によって確かな概念的知識に高める。

④発展：生きた能力に転移するため、発表したり、具体的状況へ適用したり、整理したりする。

⑤評価：思考の変容や過程を観察する。また、学習者の自己評価も大切にする。

発見学習は学習過程の類型でもある。アルゴリズム過程—半発見的過程—導かれたる発見—ひとり立ちの発見という諸過程を経験させることがかえって発見的能力をものばし、また実際的に発見学習を成立させる道であることが指摘されている。

この発見学習の考えの一端を取り入れた高校の授業とはどのようなものであろうか。次に掲げるトレーニング用紙(簡略版)は、そのことを意識して、公民(現代社会)の夏休みの課題として実施したものである。

仮説をもって身近な地域をみる（トレーニング用紙）

●なぜこのようになっているのか？（結果→問い）

例）平田に木綿街道があるのに、なぜ紡績工場は出雲にあるのか？

●おそらくこのような原因からであろう（原因の予想＝仮説）

例）流通が関係しているであろう。

●検証方法

例）出雲市にある（あった）紡績工場の立地とその歴史、木綿の歴史、一畑電車と国鉄の敷設についての歴史、紡績業の歴史、大和紡績への聞き取り調査 など

地域教材とは？

- ・ 見る・聞く・触る・臭いをかぐ・味わうといった五感を使っての対象理解（地域理解）がしやすい
- ・ 身近なことだからこそ、関心を高めやすく、社会生活の原則などを発見しやすく、主体的に物事を考える姿勢を育成させやすい

疑問やジレンマ
が起きやすい

地域教材の開発の方法

より多くの事実を集める ×

地域の特色から事実を切り取る ○

cf. 山梨ではぶどう栽培がさかん → 生育条件（概念） → 工夫へ

★なぜこの結果が？（問い） → 原因をさぐる（仮説）

→ 仮説を持って地域をみさせることが、子ども自身の概念の獲得につながっていきやすい

地理歴史科や公民科において、地域社会を素材とした教材は有効性が高い。生徒の社会認識形成に有効に働くのみでなく、価値判断にも有効な教材を提供できるからである。

広島大学の教授であった伊東亮三氏は、地域社会は探究過程や過程学習の『実験室』として高い価値を持っているとしている（「アメリカの社会科学の動向」（教育科学社会科教育 162 号、1977 年））。

それは自然科学実験室と違って、子どもはその実験室の中で観察者であるとともに参加者であるからである。したがって地域社会という実験室で学んだ一般化や推理は、たんに自然科学的知識のように中性的なものに終わらず、地域社会の中での個人的かかわり、市民としての生き方を自覚させる働きをもっている。社会科学教育と市民的資質との統一という地理歴史科や公民科の中核的課題の追求に、地域社会実験室の利用は示唆するところが大きいと思われる。

地域教材と学習問題の作り方の例を左に掲げてみた。総合的な学習の時間においては、こうした流れが必要な場合もある。

アクティブ・ラーニングを漠然と理解して、方法論だけで授業改善を行っていくのではなく、教授理論から今一度学び直していくことも重要かと最近考えている。今回はそうした自分なりの理解を紙面にまとめたところである。

地域教材と学習問題の作り方（例）

◆学習の見通し

I 社会的事象と出会い学習問題をつかむ

II 学習問題の解決を予想し、学習計画を立てる

★地域教材は、疑問やジレンマがおきやすく、また生徒たちが共有しやすい（焦点化しやすい）

* 社会的事象は大人社会のものである。生徒たちには身近でない。しかし、地域教材は身近な社会的事象。

◆学習 調べる → 確かめる/考える

◆学習の振り返り

なにがわかって、なにがわからなかったか（問題か）
調べたことを整理し、社会的事象の特色や意味を考察する。そこから広げ深める。

◆島根大学中村准教授による提案授業◆

本校の研究主題を踏まえた研究授業をととして、「生徒の主体的・能動的な学び」についての理解を深め、10月の公開授業週間に向けて授業改善等に役立てることを目的として、9月21日（金）6限目に島根大学教職大学院中村准教授に世界史の研究授業をしてもらうこととなった。当日の放課後には、講話「授業設計の意図を中心に」という内容で授業研究も予定している。